

〈論文〉

## 高校生の学校への適応感と教師との関係の検討

教師全体との関係と特定の教師への信頼感に注目して

渡邊 仁\*

### **Examination of High School Student's Sense of School Adjustment and Relationships with Teachers**

Focusing on Relationships with Teachers as a Whole and Trust in Specific Teachers

Jin WATANABE\*

#### 要旨

本研究では、教師全体との関係と特定の教師への信頼感による、生徒の学校への適応感の高さの違いを明らかにすることを目的とした。その結果、教師全体との関係が良好ではなかったとしても、信頼できる教師が一人いれば、学校への適応感は低くないことが明らかとなった。このことから、従来の生徒と教師との関係を検討した研究に不足していた、生徒と教師との関係の質を考慮した新たな知見を示唆した。

#### Abstract

The purpose of this study is to clarify the difference in the degree of school adjustment, depending on the relationships with teachers as a whole and the sense of trust in specific teachers. Results suggest that, even if a student's relationships with the majority of teachers in a school is not good, that student's sense of school adjustment may be high if there is even one teacher whom the student trusts. This finding has not been explored in previous studies on teacher-student relationships, and has implications for the quality of those relationships.

#### キーワード

学校適応 (School adjustment) 教師との関係 (Relationship with teacher(s)) 教師への信頼感 (Trust in teacher(s))

---

\* 北海道情報大学経営情報学部システム情報学科講師, Senior Lecturer, Department of Business and Information Systems, HIU

## 1. 問題

### 1-1 学校適応を捉える観点

まず初めに本研究における学校適応を捉える観点を整理する。これまで学校適応に関しては多くの研究がなされてきたが、学校適応を友人や教師との関係といった個人と環境の観点から捉えたり、学校での居心地の良さといった学校に対する主観的な認知・評価・感情の観点から捉えたりと、学校適応を捉える観点は研究によって様々であった(石田 2009)。また、高等学校(以下、高校)は学校によって環境が大きく異なり(藤原・河村 2014b)、例えば、教師との関係に価値が置かれていない反教師的な生徒文化が存在する学校では、教師との良好な関係は必ずしも学校適応に繋がらない(大久保 2005)。そのため、個人と環境との関係の観点よりも、学校に対する主観的な認知・評価・感情の観点から学校適応を捉える必要がある(渡邊 2020)。したがって、本研究では高校生の学校に対する主観的な認知・評価・感情の観点(以下、学校への適応感)から学校適応を捉え、学校への適応感の関連要因を検討することとする。具体的には、学校への適応感の関連要因として、教師との関係に焦点をあて、後述する生徒と教師との関係の質によって、学校への適応感の高さに違いがあるのかを検討する。

### 1-2 高校生の学校への適応感と教師との関係の関連

これまでに、高校生の学校への適応感と教師との関係の関連を検討した研究はいくつかあった。例えば、藤原・河村(2014a)や大久保(2005)は、高校生の学校への適応感は教師との関係と関連があることを明らかにしている。また、中本・森ほか(2007)は高校生の学校への適応感と教師

への信頼感に関連があることを明らかにしている。ただし、これらの研究を含めて、多くの先行研究では、教師との関係や教師への信頼感を測定する際に、生徒の在籍する学校の教師全体との関係が良好であるかどうか、信頼できるかどうかを測定していた。そのため、先行研究からは、教師全体との関係が良好ではないが、特定の教師とは関係が良好な生徒や、特定の教師と信頼関係を構築した生徒の学校への適応感は十分に検討されてこなかった。

一方で、中学生を対象としているが、特定の教師を思い浮かべて、その教師が信頼できるかどうかといった教師への信頼感と学校への適応感の関連を検討した研究があり、西・石津(2022)が、生徒の担任教師に対する信頼感が生徒の学校適応感に影響を及ぼしていることを明らかにしている。ただし西・石津(2022)は、担任教師を思い浮かべて、その教師が信頼できるかどうかといった特定の教師への信頼感を測定していた。そのため、担任教師への信頼感が高い生徒が学校への適応感も高かった理由として、その生徒が学校全体の教師との関係が良好であるために、学校への適応感も高かった可能性も考えられる。つまり、生徒の学校への適応感が高くなる上で、教師との関係が全体的に良好であるかどうか重要なのか、一人でも信頼できる教師がいれば良いのかという視点は、これまでの先行研究では十分に明らかにされてこなかった。

以上を踏まえて、高校生の学校への適応感の関連要因を検討するためには、教師全体との関係が良好かどうかと、学校に一人でも信頼できる教師がいるかどうかの二つの問いを同時に考慮した上で、学校への適応感を検討する必要があると考える。

### 1-3 学校への適応感の測定

なお、学校への適応感の測定については、様々な側面から検討がなされてきた。例えば、大久保（2005）は居心地の良さの感覚、課題・目的的存在、被信頼・受容感、劣等感の無さからなる学校への適応感尺度を作成し、教師との関係との間に関連があることを明らかにしている。また、神奈川県立総合教育センター（2012）は不登校の状況から抜け出して高校に登校するようになった理由の一つとして、学校での居心地と将来の目標の存在が重要であることを指摘している。さらに、河村（1999）は高校生を対象に、高校生活において満足感や充実感を得られる内容と、不適応感を覚える内容を調査した結果、周りから認められていると思うといった受容感や、周りからかわれたり、バカにされるようなことがあるといった劣等感を明らかにしていた。

以上を踏まえ、本研究では、学校への適応感の中でも、居心地の良さ、目的や目標があることによる充実感、受容感、劣等感に注目し、大久保（2005）の学校への適応感尺度を用いて、学校への適応感を測定する。

## 2. 目的

本研究の目的は、学校への適応感の関連要因として、教師との関係に焦点をあて、教師全体との関係と特定の教師への信頼感による、学校への適応感の高さの違いを明らかにすることである。

具体的には、まず生徒の教師全体との関係の良好さを測る質問を行い、質問項目への回答の平均値を基準にして、教師全体との関係が良好である群とそうではない群

に分類する。次に、特定の教師への信頼感を問う質問を行い、前述の質問で分類した二群のそれぞれにおいて、特定の教師への信頼感が高い群とそうではない群に分類する。そして、分類した群における学校への適応感の高さの違いを検討する。

これまで、小学生や中学生を対象にした学校への適応感と教師との関係を検討した研究では、主に生徒と担任教師の関係を対象にするか、生徒と教師全体との関係を対象にするのか、どちらかに限定して検討していた。そのため、担任教師との関係か教師全体との関係かのどちらか一方のみから得られた知見を一般化してしまっていた。しかし、本研究では、教師全体との関係と特定の教師への信頼感を同時に検討することで、例えば教師全体との関係は良好ではないが、一人でも信頼できる教師がいれば、学校への適応感は低くないのではないかとの仮説を立てて検討を加える。本研究は、従来の生徒と教師との関係を検討した研究に不足していた、生徒と教師との関係の質を考察することによって新たな知見を示唆することができる新規性を有するものである。

## 3. 方法

### 3-1 対象者

調査は、インターネット調査会社“GMOリサーチ”が保有する1928万名（2020年7月時点）の中から、高校生398名（男子105名・女子293名）を対象に、クローズドウェブ調査<sup>1)</sup>を実施した（2023年2月2日～4日）。なお、回答は全国12ブロック（北海道・東北・関東・首都圏・信越・北陸・東海・近畿・中国・四国・九州・沖縄）の各ブロックから抽出した。また、回答者

1) 調査会社が保有する調査モニタに対してインターネットを用いて実施する調査

には研究協力に対して同意する場合にのみ回答を始めるように求めた。さらに、回答開始後においても、回答を中止でき、中止したことによる不利益は生じないことや、質問への回答内容は研究以外の目的には利用しないことを明示した。なお、調査対象とした 398 名のうち、回答を中止した生徒は皆無であった。

### 3-2 調査内容

調査は Google Forms を用いて行い、後述の質問に対してそれぞれ教示文を記述した。調査内容は以下のとおりである。なお、回答形式は全て「あてはまらない」(1点)、「どちらかというにあてはまらない」(2点)、「どちらともいえない」(3点)、「どちらかというにあてはまる」(4点)、「あてはまる」(5点)までの5件法である。

なお、分析は全て PASW Statistics 18.0 (SPSS) を使用した。

#### 3-2-1 教師全体との関係

教師全体との関係の評価には、大久保・青柳(2004)の中高生用学校生活尺度の教師との関係因子を用いて、「先生方は生徒の気持ちをわかってくれる」「先生方は生徒の言うことを真剣に聞いてくれる」「先生方は生徒の相談に乗ってくれる」の3項目を使用した。なお、教示文は「自分が通っている学校の先生全体の印象についてお聞きします。以下、どのくらい当てはまるかを選択してください。」と記述した。

#### 3-2-2 特定の教師への信頼感

特定の教師への信頼感の評価には、中井・庄司(2008)のSTT(Student's Trust in Teachers)尺度を用いて、「私はその先生と話すのが楽になることがある」といった項目からなる安心感、「その先生は威張っているように感じる」といった項目からなる不信、「その先生は自信を持っ

て指導を行っているように感じる」といった項目からなる役割遂行評価の3因子9項目を使用した。

なお、教示文は「自分が通っている学校にいる先生の中で、信頼できる先生一人を思い浮かべてください。もし、信頼できる先生が思い浮かばない場合は、担任の先生等、一番関わりのある先生一人を思い浮かべてください。その先生に対して、以下、どのくらい当てはまるかを選択してください。」と記述した。

#### 3-2-3 学校への適応感

学校への適応感の評価には、大久保(2005)の学校への適応感尺度を用いて、「学校において周囲にとけこめている」といった項目からなる居心地の良さの感覚、「学校は将来役に立つことが学べる」といった項目からなる課題・目的的存在、「学校において周りから頼られていると感じる」といった項目からなる被信頼・受容感、「学校において周りに迷惑をかけていると感じる」といった項目からなる劣等感の無さ4因子12項目を使用した。

なお、教示文は「自分が通っている学校で、あなたの意識についてお聞きします。以下、どのくらい当てはまるかを選択してください。」と記述した。

## 4. 結果

### 4-1 教師全体との関係と特定の教師への信頼感による分類

本研究は、学校への適応感の関連要因として、教師との関係に焦点をあて、教師全体との関係と特定の教師への信頼感による、学校への適応感の高さの違いを明らかにすることが目的である。したがって、まずは教師全体との関係の良好さ、特定の教師への信頼感の高さによって分類するため、教師全体との関係得点と特定の教師へ

の信頼感得点について、平均値を求めた（表 1）。続いて、教師全体との関係得点が平均値未満の生徒の中で、安心感得点が平均値未満を A 群、平均値以上を B 群とした。そして教師全体との関係得点が平均値以上の生徒の中で、安心感得点が平均値未満を C 群、平均値以上を D 群とした。ま

た、不信得点と役割遂行評価得点も同様にして、群を分けた。ただし、不信因子の項目は全て逆転項目であり、得点が高いほど教師を信頼していないことから、不信因子を分類する際は平均値以上を E 群・G 群、平均値未満を F 群・H 群とした（表 1、表 3 において太字で強調）。

表 1 教師全体との関係と特定の教師への信頼感による分類と人数

		安心感		不信（逆転項目）		役割遂行評価	
		平均値	平均値	平均値	平均値	平均値	平均値
		3.28		2.39		3.56	
		標準偏差	標準偏差	標準偏差	標準偏差	標準偏差	標準偏差
		1.09		1.03		0.90	
		平均	平均	平均	平均	平均	平均
		未満	以上	以上	未満	未満	以上
教師全体との関係 平均値 : 3.44 標準偏差 : 1.08	平均	A 群	B 群	E 群	F 群	I 群	J 群
	未満	146	48	101	93	130	64
	平均	C 群	D 群	G 群	H 群	K 群	L 群
	以上	60	144	81	123	53	151

#### 4-2 教師全体との関係と特定の教師への信頼感によって分類した群毎の学校への適応感の高さの違い

次に、教師全体との関係と特定の教師への信頼感による、学校への適応感の高さの違いを明らかにするために、前述した群毎に、学校への適応感得点の平均値を比較する。そのため、前述した群毎に、学校への適応感尺度の三つの下位尺度について、それぞれ 1 要因分散分析を行った（表 2~4）。また、安心感によって分けた群、不信によって分けた群、役割遂行評価によって分けた群の全ての得点において、4 群間に有意差が認められたので、Tukey 法の多重比較を行った。

その結果、まず安心感で分けた群における学校への適応感尺度の下位尺度得点の有意差について述べていく。はじめに、居心地の良さの感觉得点において、B 群・C 群・D 群は A 群よりも有意に高く、D 群は C 群よ

りも有意に高かった。次に、課題・目的の存在得点において、B 群・C 群・D 群は A 群よりも有意に高く、D 群は B 群・C 群よりも有意に高かった。また、被信頼・受容感得点において、D 群は A 群・C 群よりも有意に高かった。最後に劣等感の無さ得点において、A 群・C 群は D 群よりも有意に高かった。

次に、不信で分けた群における学校への適応感尺度の下位尺度得点の有意差について述べていく。はじめに、居心地の良さの感觉得点において、G 群・H 群は E 群・F 群よりも有意に高かった。次に、課題・目的の存在得点において、G 群・H 群は E 群・F 群よりも有意に高かった。また、被信頼・受容感得点において、E 群・G 群・H 群は F 群よりも有意に高かった。最後に劣等感の無さ得点において、F 群は E 群よりも有意に高く、E 群・F 群・H 群は G 群よりも有意に高かった。



そして、役割遂行評価で分けた群における学校への適応感尺度の下位尺度得点の有意差について述べていく。はじめに、居心地の良さの感觉得点において、L群はI群・J群・K群よりも有意に高く、J群はI群よりも有意に高かった。次に、課題・目的の存在

得点において、J群・K群はI群よりも有意に高く、L群はI群・J群・K群よりも有意に高かった。また、被信頼・受容感得点において、L群はI群・J群・K群よりも有意に高かった。最後に劣等感の無さ得点において、I群はL群よりも有意に高かった。

表2 安心感によって分けた群における学校への適応感の平均値と分散分析結果

教師全体との 関係	平均未満		平均以上		F 値	多重比較
	平均未満	平均以上	平均未満	平均以上		
安心感	A 群	B 群	C 群	D 群		
居心地の良さ の感覚	2.97 (0.98)	3.69 (1.00)	3.42 (1.06)	3.90 (0.99)	21.86***	A<B, A<C, A<D, C<D
課題・目的の 存在	2.88 (0.96)	3.51 (0.99)	3.53 (1.01)	4.05 (0.82)	38.74***	A<B, A<C, A<D, B<D, C<D
被信頼・ 受容感	2.72 (0.86)	3.15 (1.11)	2.71 (0.97)	3.45 (1.12)	15.07***	A<D, C<D
劣等感の無さ	3.18 (0.86)	3.06 (0.83)	3.34 (0.79)	2.81 (1.08)	6.11***	D<A, D<C

カッコ内は標準偏差

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

表3 不信によって分けた群における学校への適応感の平均値と分散分析結果

教師全体との 関係	平均未満		平均以上		F 値	多重比較
	平均以上	平均未満	平均以上	平均未満		
不信	E 群	F 群	G 群	H 群		
居心地の良さ の感覚	3.22 (0.77)	3.06 (1.26)	3.73 (1.05)	3.78 (1.02)	12.07***	E<G, E<H, F<G, F<H
課題・目的の 存在	3.19 (0.72)	2.86 (1.22)	3.84 (0.85)	3.93 (0.95)	29.32***	E<G, E<H, F<G, F<H
被信頼・ 受容感	3.05 (0.71)	2.58 (1.10)	3.43 (1.08)	3.10 (1.14)	10.21***	F<E, F<G, F<H
劣等感の無さ	2.98 (0.64)	3.33 (1.00)	2.50 (0.96)	3.27 (0.96)	15.76***	E<F, G<E, G<F, G<H

カッコ内は標準偏差

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

表4 役割遂行評価によって分けた群における学校への適応感の平均値と分散分析結果

教師全体との 関係	平均未満		平均以上		F 値	多重比較
	平均未満	平均以上	平均未満	平均以上		
役割遂行評価	I 群	J 群	K 群	L 群		
居心地の良さ の感覚	2.97 (0.93)	3.51 (1.13)	3.26 (1.14)	3.93 (0.93)	22.59***	I<J, I<L, J<L, K<L
課題・目的の 存在	2.90 (0.94)	3.31 (1.07)	3.48 (1.01)	4.04 (0.83)	35.68***	I<J, I<K, I<L, J<L, K<L
被信頼・ 受容感	2.77 (0.86)	2.95 (1.10)	2.76 (0.94)	3.40 (1.14)	10.57***	I<L, J<L, K<L
劣等感の無さ	3.26 (0.79)	2.92 (0.92)	3.08 (0.86)	2.92 (1.08)	3.54*	L<I

カッコ内は標準偏差

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

## 5. 考察

本研究は、学校への適応感の関連要因として、教師との関係に焦点をあて、教師全体との関係と特定の教師への信頼感による、学校への適応感の高さの違いを明らかにすることが目的であった。

そのため、まずは教師全体との関係と特定の教師への信頼感による分類を行った。その結果、人数はそれぞれ異なるが、A群・I群とD群・L群の人数が多く、B群・J群とC群・K群の人数が少なかった。つまり、教師への不信を除いて、教師全体の関係が良好ではない生徒は特定の教師も信頼していない生徒が多く、教師全体との関係が良好な生徒は特定の教師も信頼している生徒が多いということが言える。これは、中村・浦(2000)や岡・葛西(2010)が、教師が生徒をサポートすることで、生徒と教師の関係が良好となり、生徒の教師に対する信頼感が増すことを示唆していることと、本研究の結果は同様の分析結果となった。加え

て、本研究で予想していたように、教師全体との関係の良好さが平均未満であるが、特定の教師への信頼感は平均以上(F群は平均未満)である生徒(B群・F群・J群)も一定数いることがわかった。したがって、教師全体との関係が良好ではないと回答している生徒の中にも、特定の教師への信頼感の低い生徒が一定数存在していることを示すことができた。

次に、教師全体との関係と特定の教師への信頼感によって分類した群ごとに、学校への適応感得点の平均値を求めた。なお、本研究では、教師全体との関係と特定の教師への信頼感を同時に検討することで、教師全体との関係は良好ではないが、一人でも信頼できる教師がいれば、学校への適応感の低いとの仮説を立てた。そのため、教師全体との関係の良好さが平均未満であるが、特定の教師への信頼感が平均以上(F群は平均未満)であるB群・F群・J群に焦点をあてて考察していく。

一点目として、教師全体との関係の良好さが平均未満で、特定の教師への安心感・役

割遂行評価が平均以上の生徒 (B群・J群) は、特定の教師への安心感・役割遂行評価が平均未満の生徒 (A群・I群) よりも、居心地の良さや学校へ通う目的があることによる充実感が有意に高かった。また、教師全体との関係の良好さが平均以上で、特定の教師への安心感・役割遂行評価が平均未満の生徒 (C群・K群) とは有意な差はなかった。これらの分析結果は、本研究が予想していたとおり、仮に教師全体との関係が良好ではなかったとしても、特定の教師への安心感や教師としての役割遂行評価が高ければ、学校での居心地の良さや充実感は低くないことを示唆する。つまり、「担任に対する信頼感は直接的に生徒の学校適応感に影響を及ぼしている」ことを明らかにした西・石津 (2022) に対して、本研究は教師全体との関係が良好かどうかということも同時に考慮するという視点を新たに示すことができたと考える。

二点目として、教師全体との関係の良好さが平均未満で、特定の教師への不信が平均未満の生徒 (F群) は、特定の教師への不信が平均以上の生徒 (E群・G群) よりも、劣等感の無さが有意に高かった。つまり、教師への不信感が弱い生徒は、教師への不信感が強い生徒に比べて劣等感を抱いていないということになる。そのため、中本・森ほか (2008) が教師への不信感と劣等感の無さに負の関連があると指摘していることと同様の傾向があることを示すことができた。

一方で、居心地の良さ、充実感については、教師全体との関係の良好さが平均未満で、特定の教師への不信が平均未満の生徒 (F群) は、特定の教師への不信が平均以上の生徒 (E群) と有意な差はなく、教師全体との関係の良好さが平均以上の生徒 (G群・H群) に比べると有意に低かった。つまり、特定の教師への不信が高くて低くても、教師全体との関係が良好である生徒の方が、

学校で居心地良く、高い充実感を覚えながら過ごしていると言える。ただし、受容感については、特定の教師への不信が平均未満の生徒 (F群) は、特定の教師への不信が平均以上の生徒 (E群) よりも有意に低かった。この理由として、教師全体との関係が良好ではなく、特定の教師への不信感も強い生徒が在籍する学校では、反学校的な雰囲気がある可能性が考えられる。つまり、反学校的な雰囲気がある学校において、教師への不信感が強い生徒は、周りの生徒から受容されていることが考えられるからである。渡邊 (2022) も、学校への従順性が低い反学校的な雰囲気の学校では、教師との関係に価値が置かれていないことを指摘しており、特定の教師への不信感が弱い生徒は、相対的に受容感が低くなってしまった可能性が考えられる。

以上のことから、本研究では、教師全体との関係と特定の教師への信頼感を同時に検討することで、教師全体との関係が良好ではなかったとしても、生徒が在籍する学校の中に一人でも信頼できる教師がいれば、学校への適応感が低くないことを示すことができたと考える。そのため、教育実践への示唆として、教師全体が生徒と良好な関係を形成することはもちろんのこと、それに加えて生徒が在籍する学校の中で一人でも信頼できる教師を見つけられるようにすることが重要であると考えられる。具体的には、同じ学校に勤務する教師同士が似通った価値観や指導観にならずに、多様な教師集団になるということが重要であると考えられる。なぜなら、多様な教師集団であれば、生徒は信頼できる教師を一人は見つけられる可能性が高くなるからである。また、担任教師がクラスの生徒を一人で抱え込まないことも重要であると考えられる。なぜなら、クラス全員の生徒が担任教師のことを必ずしも信頼できるとは限らないことか



ら、様々な教師が生徒と関わることで、生徒は信頼できる教師を見つけやすくなると考えられるからである。

最後に、今後の課題を述べていく。本研究では教師全体との関係と特定の教師への信頼感の得点において、高い群と低い群に分ける際、調査項目の得点の平均値以上と平均値未満に分けて分析を行った。しかし、調査項目の得点の平均値が、特定の教師に対する不信得点を除いて、5件法の得点の中心値 3.0 を超えていた。つまり、本研究では教師全体との関係の得点の平均値未満を、教師全体との関係が良好ではない群、特定の教師への信頼感の得点の平均値未満を、特定の教師への信頼感が低い群としたが、どちらかという教師全体との関係は良好であり、特定の教師に対する信頼感もどちらかという高いという結果であった。そのため、今後は調査対象者数を増やすことで、得点の中心値 3.0 を上回る群と下回る群で比較することも必要である。

#### 参考文献

藤原和政・河村茂雄 (2014a) 「高校生における学校適応とスクール・モラルとの関連—学校タイプの視点から」『カウンセリング研究』第 47 巻第 4 号, pp.196-203。

藤原和政・河村茂雄 (2014b) 「高等学校教育における学校不適応問題への対応の変遷」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』第 21 巻第 2 号, pp.71-81。

石田靖彦 (2009) 「学校適応感尺度の作成と信頼性、妥当性の検討」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第 12 巻, pp.287-292。

神奈川県立総合教育センター (2012) 「平成 23 年度 不登校経験者の定時制高校進学後の動向及び要因分析に関する一考

察—学校・家庭生活調査から見えてくる現状と課題」『神奈川県立総合教育センター・神奈川県立高等学校定時制通信制教頭会・鳴門教育大学教職大学院』。

河村茂雄 (1999) 「生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発—学校生活満足度尺度 (高校生用) の作成」『岩手大学教育学部研究年報』第 59 巻第 1 号, pp.111-120。

中井大介・庄司一子 (2008) 「中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連」『発達心理学研究』第 19 巻第 1 号, pp.57-68。

中本浩揮・森司朗・屋良朝栄 (2007) 「高校生における教師に対する信頼感と学校適応感の関係」『鹿屋体育大学学術研究紀要』第 35 巻, pp.1-13。

中村佳子・浦光博 (2000) 「ソーシャル・サポートと信頼との相互関連について—対人関係の継続性の視点から」『社会心理学研究』第 15 巻第 3 号, pp.151-163。

西裕太郎・石津憲一郎 (2022) 「担任に対する信頼感が生徒の学校適応感に及ぼす影響—マルチレベル分析による学級雰囲気の媒介効果の検討」『学校心理学研究』第 21 巻第 1 号, pp.11-20。

岡直希・葛西真記子 (2010) 「教師によるサポートが生徒の教師への信頼感や学校適応に及ぼす影響」『鳴門生徒指導研究』第 20 巻, pp.42-55。

大久保智生 (2005) 「青年の学校への適応感とその規定要因」『教育心理学研究』第 53 巻, pp.307-319。

大久保智生・青柳肇 (2004) 「中高生用学校生活尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」『日本福祉教育専門学校研究紀要』第 12 巻, pp.9-15。

渡邊仁 (2020) 「高校における学校適応研究の過去 10 年の動向と課題」『北海道

『大学大学院教育学研究紀要』第137巻, pp.1-30。

渡邊仁 (2022) 「高校における友人及び教師との関係と学校への適応感の関連—

学校や教師に対する生徒の態度による学校タイプに注目して」『北海道情報大学紀要』第34巻, pp.1-11。

## 付録

回答形式は以下のとおり、5件法である。

- 1: あてはまらない
- 2: どちらかというにあてはまらない
- 3: どちらともいえない
- 4: どちらかというにあてはまる
- 5: あてはまる

上段：人数 下段：割合

調査内容	質問項目	1	2	3	4	5
教師全体との関係	先生方は生徒の気持ちをわかってくれる	44 11.1%	59 14.8%	103 25.9%	128 32.2%	64 16.1%
	先生方は生徒の言うことを真剣に聞いてくれる	28 7.0%	55 13.8%	102 25.6%	140 35.2%	73 18.3%
	先生方は生徒の相談に乗ってくれる	25 6.3%	38 9.5%	104 26.1%	137 34.4%	94 23.6%
特定の教師への安心感	私はその先生と話すとき気持ち良くなることもある	41 10.3%	46 11.6%	123 30.9%	111 27.9%	77 19.3%
	その先生にならいつでも相談ができると感じる	41 10.3%	58 14.6%	127 31.9%	109 27.4%	63 15.8%
	私が不安なとき、その先生に話を聞いてもらえると安心する	39 9.8%	52 13.1%	148 37.2%	91 22.9%	68 17.1%
特定の教師への不信	その先生は威張っているように感じる	132 33.2%	104 26.1%	93 23.4%	51 12.8%	18 4.5%
	その先生は自分の考えを押し付けてくると思う	109 27.4%	92 23.1%	120 30.2%	51 12.8%	26 6.5%
	その先生は一度言ったことをこころと変えたと感じる	115 28.9%	94 23.6%	124 31.2%	43 10.8%	22 5.5%
特定の教師への役割遂行評価	その先生は自信を持って指導を行っているように感じる	22 5.5%	36 9.0%	133 33.4%	136 34.2%	71 17.8%
	その先生は悪いことは悪いとはっきりと言うと思う	24 6.0%	41 10.3%	118 29.6%	127 31.9%	88 22.1%
	その先生は何事にも一生懸命であると思う	18 4.5%	32 8.0%	124 31.2%	124 31.2%	100 25.1%
居心地の良さの感覚	学校において周囲にとけこめている	35 8.8%	44 11.1%	93 23.4%	154 38.7%	72 18.1%

	学校において周囲となじめている	42 10.6%	48 12.1%	109 27.4%	120 30.2%	79 19.8%
	学校において周りの人と楽しい時間を共有している	34 8.5%	34 8.5%	106 26.6%	127 31.9%	97 24.4%
課題・目的 の存在	学校は将来役に立つことが学べる	32 8.0%	51 12.8%	86 21.6%	143 35.9%	86 21.6%
	学校でこれからの自分のためになることができる	35 8.8%	30 7.5%	114 28.6%	138 34.7%	81 20.4%
	学校においてやるべき目的がある	33 8.3%	45 11.3%	117 29.4%	125 31.4%	78 19.6%
被信頼・受 容感	学校において周りから頼られていると感じる	46 11.6%	73 18.3%	134 33.7%	98 24.6%	47 11.8%
	学校において周りから期待されている	43 10.8%	100 25.1%	119 29.9%	89 22.4%	47 11.8%
	学校において周りから必要とされていると感じる	48 12.1%	68 17.1%	145 36.4%	93 23.4%	44 11.1%
劣等感の無 さ	学校において周りに迷惑をかけていると感じる	58 14.6%	95 23.9%	127 31.9%	77 19.3%	41 10.3%
	学校において自分だけがだめだと感じる	61 15.3%	75 18.8%	132 33.2%	87 21.9%	43 10.8%
	学校において役に立っていないと感じる	50 12.6%	67 16.8%	147 36.9%	87 21.9%	47 11.8%